

恐慌が渦巻き、冷害の反復する暗い谷間の時代に、北海の羊蹄風の吹きすさぶ寒村の小農場で、私は小学校時代をすごした。その頃どうしたならば、安定した幸福な農村をきずくことが出来るかと、毎日小さな胸で考えていた。長い悶悩んだ末、冷害を克服するための技術の改善と、大物の農林大臣が出なければどうにもならないという結論に達した。そこで将来は農林大臣になってやろうと思った。満州事変を経て暫らくして小学校を卒業し、私は両親をくどいて、汽車で数時間かかる土地の学校に進学した。

農村出身の生徒に特有の、朴訥で非社交的なこの少年は、家族から引離された寄宿舎で孤独の日が多く、余り勉強もせず柔道と図書室の小説に熱中し、学業成績も芳しくなく「干瓢」のニックネームをもつ担任の先生をあわてさせた。上級に進むに従って、少しは勉強もするようになり、五・一五から二・二六事件を経過して、政治のことを知るようになり、農林大臣の夢は消えうせた。だが農村問題に対する関心は、依

然として強く、大学は農学部を決めた。

入学して間もなく「農学盛んにして農業亡ぶ」という、かの有名な横井博士の言を、ある教授から聞いたときはショックであった。農村を救うために農学に志したのに教



農民史探究の彼方にあるもの

岡 光 夫

授は絶望的な言を弄したから、一層農学が嫌いになった。この言葉の真理は製作者たる横井博士も、かの教授も意識していなかったが、幾分かの真理のあることを可成り後になって私は発見した。それは戦陣生活を終えて学園に復帰し、勉強だけに生きが

いを感じ、卒論をでっち上げるために、農村調査をしているさなかであった。(卒論は北海道道庁から公刊)

即ち、地租改正以来明治政府は、一貫して地主保護の政策を打ち出し、農学を地主の搾取を旺盛にし、合理化するための武器と考え、それに血肉を与えるものとして、地主企業的なユンカー経営に基盤をもつドイツ農学を輸入した。このような因縁をもつ農学が盛んになれば、農業(小農民経営)の亡びるのは当然のことである。

これを発見してからの私の農学の目標は、「農業を盛んにする農学」におかれた。大学卒業後さらに大学院で数年をおくり、江戸時代の農民の苦悩の歴史を探究し、今日におよんでいる。私が歴史に求めるものは、趣味から出発し、研究だけに目標をおき、それに埋没している史学(「死学」)者とは異なって、将来の農業の進むべき指針をうるところにある。私は今、幼き日の夢とは全く異った道歩んでいるが、根本の精神の距離の隔りはないと思っている。

(経済学部教授・日本経済史)